

潮 流

都市と農山漁村の交流

取締役調査第二部長 都 俊生

村おこしや町おこしなど、活性化に取り組んでいる地域を視察させて頂いているが、よく「地域資源」という言葉に遭遇する。地域資源とは地域の経済活性化に繋がる商売の種だ。農林水産業に基盤をおく地域では、その地域の農林水産物に加えて、他の地域に負けない競争力のある特産物が重要な地域資源になる。また、一次産業の背後に広がる、雄大な美しい自然環境、豊かな水資源、きれいな空気なども有力な地域資源だ。さらには、伝統文化や農林水産業を支える人々の知識や技術、そしてその地域の人々の人情や人柄・・・なども貴重な地域資源だ。多くの地域が、地域資源の発掘に力を入れているが、なかなか地方の人達だけで地域資源を発掘するのは難しい。昔から地域に当たり前に存在しているものの中からそれが価値ある地域資源であることを発見するにはやはり外部の人の眼が必要のようだ。

「地域資源」という言葉には都市の側に軸足を置いた価値観のようなものを感じられる面があるが、都市と地方との交流を通じて都市もまた、地方から学ぶものは多い。都市と農山漁村が相互に恩恵を与え、受ける関係にあることを学ぶことが大切だ。農産物あるいは観光地としての商品価値だけを評価するのではなく、それを育む農山漁村の存在自体を貴重なものとして、地域丸ごと高く評価する動きも始まっている。産地訪問や農業体験を通じた生産者と消費者との交流により相互の信頼感や安心感を高めている。また、自然とのふれあいや農業体験を通して、生きるうえでの食の大切さや、背後に広がる自然環境の大切さを再認識することにも結びついている。自然豊かな農山漁村での生活体験は、特に子どもの教育にとって大変有益だと考える人は多いようだ。政府は昨年、「子ども農山漁村交流プロジェクト」を発足させており、総務省、文部科学省、農林水産省が連携して、将来を担う子ども達の教育活動の場として、小学校における農山漁村での農林漁業体験や自然体験、地域の人々との交流を行う 1 週間程度の宿泊体験活動を推進している。平成 20 年度からは、全国の小学校、23,000 校で 120 万人の小学生がこの活動に参加できるよう、農山漁村における宿泊体験の受入体制の整備、地域の活力をサポートするための推進体制の整備等を進めるとしている。

米国などでも、古くから同じような活動として、サマー・スクールというものがある。夏休みになると 2～3 週間ぐらい親元から離れて、郊外の豊かな自然に恵まれた環境下で、野外活動やスポーツを楽しんだり、学科の学習をしたりする仕組みだ。森林や湖畔などでの野外活動を通じて、自然の素晴らしさを実感し、友達との友情も育まれ、楽しい思い出となりいつまでも記憶に残るようだ。将来の社会を支える若者の良い教育活動の場となっている様子だ。

今や新興国ほか多くの国々が工業化を進め、先進国に迫る勢いとなっており、地球環境が危機に瀕しているほか食料危機の到来も心配される状況になっている。バランスの取れた国土を形成し、生物多様性に富んだ豊かな自然環境を保全しつつ地域社会の活力を高めていくことが必要になっている。都市と農山漁村との交流により、食育や環境教育などを通じ、成熟社会に相応しい持続可能な社会作りに向けた取組みがなされることを期待したい。